Osaka University Knowledge Archive

Title	精神分裂病者の追跡眼球運動 : 側脳室拡大との関係
Author(s)	吉田, 功
Citation	大阪大学, 1985, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34991
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【34】

氏・(本籍)	吉田　功（よしだ　いさお）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 6976 号
学位授与の日付	昭和60年8月2日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**精神分裂病者の追跡眼球運動** **――側脳室拡大との関係――**
論文審査委員	(主査) 教授 西村　健 (副査) 教授 松永　亨　教授 小塚　隆弘

論文内容の要旨

（目　的）

精神分裂病者の追跡眼球運動の障害については，過去10年間に，Holzmanらを中心に多くの報告がある。しかしその原因はいまだ明らかではない。本研究は精神分裂病者の追跡眼球運動を調べ，それに影響を与えると思われる諸因子――年齢，精神分裂病の病型，罹病期間，服用中の向精神薬の種類および量，とりわけCT上での側脳室の拡大――との関係を明確にすることにより，精神分裂病の病態解明に寄与するのを目的とした。

（方　法）

DSMⅢで精神分裂病と診断された者50名（男20名，女30名，年齢20～55歳，平均36.2歳）を被験者とした。病型は解体型15名，緊張型20名，妄想型10名，分類不能型5名であり，罹病期間1～31年，平均10.2年であった。

眼前28cmに設置されたブラウン管上で視覚20度の距離を水平方向に単振動する光点を視標とした。視標追跡時のEOG波型から視角速度が40度／秒以上の眼球運動を衝動性眼球運動と規定し，30秒間の追跡中に出現する衝動性眼球運動の数（出現頻度）を追跡眼球運動の拙劣さの指標とした。またCT上でモンロー孔より上部の3スライスを用いてデジタイザーにより側脳室と頭蓋内腔の面積を求め，全頭蓋内腔の面積に占める全側脳室の面積の割合いを算出し，脳室容積指数Ventricular Volume Index（以下VVI）とした。このVVIを脳室拡大の指標とした。

正常対照者としての被験者は，追跡眼球運動とCTの検査にそれぞれ40名（男14名，女26名，年齢20～59歳，平均39.7歳），43名(男22名，女21名，年齢20～55歳，平均38.9歳）であった。

（結　　果）

1）衝動性眼球運動の出現頻度とVVIは，ともに正常群に比し分裂病群で有意に大きかった。

2）正常群では衝動性眼球運動の出現頻度とVVIは，加齢にともない有意に増大したが，分裂病群では衝動性眼球運動の出現頻度は年齢と相関せず，VVIと年齢の相関も正常群と比較して小さかった。

3）衝動性眼球運動の出現頻度とVVIは，ともに精神分裂病の病型間で有意の差は認められなかった。また両者とも罹病期間との間に相関はみられなかった。

4）衝動性眼球運動の出現頻度と服用中のフェノチアジン系薬剤，ブチロフェノン系薬剤，フェノバルビタールの用量との間に有意の相関はみられなかった。

5）数量化理論Ⅰ類を用いた多変量解析では，衝動性眼球運動の出現頻度はVVIにのみ有意の相関があり，年齢，性，病型，罹病期間，向精神薬の服用量との相関はみられなかった。

（総　　括）

正常者では age dependent であると考えられる追跡眼球運動と側脳室の大きさが，精神分裂病者では両者とも年齢との関係が少なくなっており，年齢以外に関与している因子の存在が示唆された。また精神分裂病の病型や罹病期間との関係では，追跡眼球運動と側脳室の大きさは類似の結果を示した。さらに多変量解析（数量化理論Ⅰ類）では，精神分裂病者における追跡眼球運動の障害は側脳室の大きさにのみ相関がみられた。

以上より追跡眼球運動の障害と側脳室の拡大は関連する現象であると考えられ，両者を有する精神分裂病の一群の存在が示唆された。

精神分裂病の追跡眼球運動を拙劣にする障害部位は脳幹より上部であるとするHolzmanらの考えと，本研究の結果とをあわせて考えると，その障害部位としては大脳両半球の関与が予想される。

論文の審査結果の要旨

本研究は精神分裂病者の追跡眼球運動を定量的に分析し，年齢，病型，罹病期間，服用中の薬剤の種類と量，CT上より求めた側脳室の大きさとの関係を調べたものである。その結果，分裂病者の追跡眼球運動の拙劣さは，側脳室の拡大と密接な関係を有し，その他の項目とは有意な関係のないことを明らかにするとともに，拙劣な追跡眼球運動と側脳室の拡大を同時に示す分裂病の一群の存在を想定した。以上の結果は，いまだ未解決の分裂病の原因の解明に寄与するものであり，学位に値すると考えられる。